論説

「トルコ文字」導入過程にみる文字表象の政治性

穐山祐子

一　はじめに

一九二八年、建国まもないトルコ共和国がアラビア文字を廃し、ラテン文字をもとにした「トルコ文字」を採用したことはよく知られている。文字革命と呼ばれるこの出来事は、文字表記の転換がきわめて短期間に達成された例として、様々な研究で言及されてきた。伝統的価値観を脱し、西欧に範をとる世俗的国民国家へ大きく舵が切られようとする当時の政治的文脈の中で、オスマン・イスラーム的過去を背負った文字の変更は、一連の社会改革の中のなかでもきわめて象徴的な事業であった。

トルコにおいて文字革命の「成功」は、共和国史の重要な一ページとして一般にも広く認知されている。国父アタテュルクの肝いりで設立されたトルコ言語協会や、トルコ歴史協会を中心になされた多くの研究は、トルコ語の改革とその普及の記録をつうじて、共和国レジームの正統性の強化、革命史の神話化に寄与し、成功言説を醸成してきた(1)。この一方、ラテン文字表記への移行によってもたらされたオスマン・イスラーム文化からの断絶がトルコ社会の大きな損失であったという主張は長らく存在する。文字革命から八十年以上が過ぎた今日のトルコにおいても、文字表象は政治的な問題を孕んでいるのである(2)。

文字はしばしば、ある言語を別の言語と差別化する機能を持ち、同時に、同じ文字を用いる集団との地域的、言語的、宗教

的なつながり、文化的統一性を示す象徴的な役割を担うとされる[3]。オスマン臣民からトルコ国民が生み出されようとしていた共和国建国期、集団的アイデンティティ認識の変容が文字表象の選択に少なからぬ影響をもたらしたことは明らかであろう。このような重大な決定は、どのような論理のもとに承認されたのであろうか。本稿では矢継ぎ早に様々な改革がなされた共和国建国期における知識人たちの議論のなかで、文字問題の何が争点となり、支持、不支持がいかなる根拠に基づいて表明されたのかをたどったうえで、政策の承認・決定に際してどのような論理が用いられたのかを「トルコ性」や「トルコ国民」認識とのかかわりから明らかにし、国民国家建設過程において新たな文字表象が政治的にどのように機能したのかを考察することにする。

二　公定史における文字革命の捉え方

政策実施当該時期において、文字革命の理由づけは公式にはどのように説明されていたのだろうか。建国期の公定史観をつぶさに観察できる一九三一年教育省刊行の高校教科書『歴史』第四巻において、文字革命は以下のように叙述されている。

読み書きは、習得が非常に困難で、長い年月を必要とする技術であった。トルコ語には八つの母音を表す文字が必要であるにもかかわらず、アラビア文字には母音を示す文字は三つしかない。トルコ人たちがこの文字を何百年も用いてきたことは、文字の発達と美的形式の進化、文字が絵画や建築分野において高い価値を持つ基本的要素になることに大きく貢献した。しかし習得の困難さ故に、トルコ世界の教育、知識に関する分野の脆弱性の要因となった。

国家の終わりなき発展、不朽の栄達のために、全存在を投げ打ち、様々な要因、とりわけ劣悪な統治によって失われた道程を、素早い前進で勝ち取ろうと決意された歴史的な時代において、学識の力の第一の媒体であるアルファベットを改良し、トルコ語の構造に適した形にする必要があった。アラビア文字の改良はトルコ語の綴り方に鑑みると不可能な方法であった。トルコの偉人たちによる千年の努力でも達成されなかった解決法をさらに何年も、何百年も試みる意味はなかった。

偉大な歴史のなかで多くの主要な文字を発明したトルコ民族にとって、新たな形をさらに発明して用いることは不可能ではなかった。しかしながら、世界との交流が非常に密で、不可欠となった時代において、こうした試みはトルコ性に適

切な利益をもたらすものではなかった。トルコ語に適していると同時に、文明世界において国際的な文字媒体として定着している形式の承認がより適切であった。こうして、今日ラテン文字として知られている形を基本に、トルコ文字を作る方法が選ばれたのである(4)。

ここで語られる、母音を示す文字が少ないアラビア文字は母音数が多いトルコ語の表記には適さず、表記法の改変をもってしても適応は不可能であったとの認識は、文字革命の功績を積極的に評価する人々の間で長く引き継がれてきた(5)。しかし、この見解はやや妥当性に欠けるように思える。後述するように、共和国以前の文字表記に関わる問題は、文字の改良手法について知識人の間で意見の統一が計れず、また国家など強力な権威による介入がなされなかったことに起因したといったほうが正確であろう。そもそも、一〇世紀半ば以来使用されてきたアラビア文字表記が抱えた問題は、どのように顕在化したのだろうか。

三　オスマン期における近代化と文字問題の発生

一九世紀中葉のタンズィマート期、オスマン帝国は行政、軍事などの分野を皮切りに近代化に邁進していた。西側の学問との接触は、ラテン文字を用いた西欧諸語の表記の簡便さに比べたときの、オスマン語表記の複雑さを否応なく浮かび上がらせた。当時、オスマン帝国における新聞、印刷産業は急速に拡大していたが、ラテン文字に比べてはるかに多くの活版を用いるアラビア文字表記の印刷には、手間のかかる煩雑な作業が要求された(6)。また、一八五五年にヨーロッパからイスタンブルに到達する電報回線を使用するには、ラテン文字を用いねばならなかった(7)。このように、流入する近代技術の前にあって、アラビア文字表記は機能性や効率性に欠けていた。さらに、コーラン暗誦を中心とする旧式教育の近代化を背景に意識されるようになった識字問題が、アラビア文字表記問題と混交した形で議論されるようになっていく。

一八六二年、時の教育相でありオスマン学術協会の創設者、ミュニフ・パシャは、読み書き簡易化のため新たな文字の創出、および母音記号の使用を提案した。ミュニフ・パシャは識字問題だけでなく、印刷業で見られる問題も解決できるような実用的な文字システムの必要性を主張していた(8)。一八六三年には、アゼルバイジャンの劇作家アフンドザーデが発案した新しい母音記号を用いる方法が、ミュニフ・パシャ同席のもと、オスマン学術協会で紹介された。しかし、反応は消極的なものであり、

現実的には適用は困難であると位置づけられた[9]。当時ミュニフ・パシャはラテン文字の簡便さについて言及していたが、その受容については明言しなかったという[10]。

歴史的に多宗教、多言語を包摂する世界である中東、バルカン地域における文字は、宗教的アイデンティティを可視化する目印として重要であった。神から贈られたものとされるアラビア文字の使用は、イスラーム世界の盟主を標榜するオスマン帝国にとっては国家のあり方の根幹に関わる問題であり、その廃止は到底容認しえぬことであった[11]。スィナーシーら進歩的識人たちが展開したラテン文字採用論は知識人サークルの枠を飛び越えるには到らず、拒絶も根強かった[12]。タンジマート期の代表的な啓蒙家ナームク・ケマルは読み書き問題の根源は教育方法にあると主張し、ムスリムの一体性擁護の観点からラテン文字採用論に反対の論陣を張っている[13]。

文字を接続せず記す方法や、母音を示す記号を付加する方法など、アラビア文字表記をトルコ語に最適化しようとする試みは、オスマン帝国最末期まで続けられた[14]。しかし、文字表記の問題は解決を見ぬまま、帝国は崩壊を迎える。国家が文字問題に積極的に乗り出すには、言語がナショナリズム強化の道具として国家政治のなかで決定的な役割を演じ始める共和国の建国を待たなければならない。

四　共和国建国期におけるラテン文字導入議論の展開

共和国建国前夜、オスマン期から一貫してラテン文字受容を唱導してきたジャーナリスト、ヒュセイン・ジャーヒトは、「ラテン文字」と題された論説の冒頭で「深い無知の闇」にあるトルコの識字率の低さを憂いている。一九世紀以来、識字率の低さの根源はアラビア文字にあるとの見方がラテン文字受容派の間に形成されていたが、ヒュセイン・ジャーヒトも同様の立場をとるひとりであった。彼は国家の繁栄には識字問題の解決が必須であるにもかかわらず、これまで教育の普及は口にされるだけで、実際には本気で取り組まれてこなかったと批判した。

〔……〕われわれはこの国の非識字率を減じる事はできないだろう。なぜなら、われわれの文字が障害となっているからだ。われわれの子供たちは学校で三、四年勉強した後も、正しく読むことができない。子供だけではない、誰もが言葉をすべて正しく読んでいるとはいえない。このような言語、このような教育があっていいのか。ある村の子供が何年も学校へ行き、何も学べないのなら、なぜ時間を無駄にさせる必要があろう。なぜ田畑で働いてはいけないのか。

〔……〕われわれを現在の文字に繋ぎ止めているのは何か。この文字を用いることの宗教的義務は一切ない。われわれ民族の文字でもない。にもかかわらず、ラテン文字を受容して、だれもがすぐに読み書きを習得することで得られる無限の利益をなぜ拒絶するのか[15]。

ヒュセイン・ジャーヒトは文明的な近代国家トルコの姿を見据えるなかで、アラビア文字には「宗教的義務」も「民族的帰属」もないことを主張し、ラテン文字受容に対する反論が「論理より感情に基づくものである」ことを批判した上で、国家のために犠牲を払える人々が、なぜ文化的犠牲については払おうとしないのかという疑問を表明している。しかし、彼自身が「ラテン文字受容論者が現在においてこの国の知識層の中で少数派であることはわかっている」と認めているように、ラテン文字の導入にはいまだ抵抗が大きかった。

たとえば、ヒュセイン・ジャーヒトの論説発表に半年ほど先立つ、一九二三年二月に開催されたイズミル経済会議では、議長を務めた解放戦争の立役者キャーズム・カラベキルが、議題にあがったラテン文字導入の提案に強硬に反対している。一連の主張は、ラテン文字化がイスラーム諸国を刺激する材料となり、ムスリムの連帯を破壊するという一点を中心に展開する。彼はラテン文字受容を国内問題ではなく「全世界の三億五千万のムスリムに属する」重大な問題と位置づけ、すでにラテン文字表記に移行していたアルバニアやアゼルバイジャンの同志は「恐ろしい災厄」に陥ったと述べた上で次のように続ける。

〔……〕これが承認された暁には、この国は大混乱に陥るだろう。われわれの書庫を満たす聖なる書物、歴史、物語、何千巻もの著作の数々がこの文字で記されている。全く異なる姿の文字を承認したその日、われわれは最も大きな災厄にさらされることになる。これにより、われわれは全ヨーロッパの手に素晴らしい武器を与えることになるのだ。この行為はイスラーム世界に敵対するものだといわれるだろう。すなわち、トルコ人たちは異人の文字を受け入れ、キリスト教徒になったと。これがわれわれの敵がなした悪魔的思いつきなのである[16]。

カラベキルは、この「邪悪な思いつき」が「非ムスリムの人々から構成される一群の通訳たちを介して、トルコに親しむ外国人たちに至る所で吹き込まれている」と告発し、ラテン文字化は、「忠実な顔をした裏切り者」、すなわち帝国内の非ムスリムたちによってもたらされたプロパガンダにすぎないとして

いる。カラベキルにとってラテン文字は近代性ではなくキリスト教を象徴するものであり、それは彼が想像するあるべき「トルコ性」とは相容れないものであったのである。

反対派の意見が根強く存在したことは、一九二六年三月二八日から日刊紙アクシャムが行った、「ラテン文字を認めるべきか否か」と題した連載記事にも見ることができる。重要な懸案であるラテン文字の受容がどのような問題を引き起こし、またどのような利益をもたらすのかを検討するため、言語学者をはじめとする「専門家」に取材が行われた。回答者十六名のうち、ラテン文字受容を支持したのは三名のみであった。

すでに用いられている書籍が使用できなくなることは重大な社会的、文化的損失であるとの意見と並んで、とりわけ大きく問題にされているのは、識字率の低い理由は文字にあるのではないという主張である。反対派の間では、識字率の低さは十分とは言いがたい学校教育や、話し言葉に基づく平易なトルコ語で書かれた本の不足に原因があるとの意見が大勢を占めた(17)。また、ラテン文字をもってトルコ語を完全に記述するには、結局改良を加えることが必要となるため、現在まで用いてきたアラビア文字を継続して用いる方が理にかなっているとも説かれた(18)。加えて、読み書きの問題を解決するためには、外国語彙の表記法のゆれを解消するなど、まずトルコ語の正書法を確立する必要があることも指摘された(19)。

アクシャム紙上でもラテン文字導入不支持を表明した反対派の代表的人物、ユダヤ系言語学者アヴラム・ガランティは、一九二七年にアラビア文字使用を継続すべきとする内容の著作を発表している(20)。ガランティは、ラテン文字の利便性を一定程度認めたうえで、古典が忘れられることによる過去との紐帯の断絶や、アラビア文字を用いている国々との間の「ある種の親近感」が失われることなどをあげ、ラテン文字への移行が長期的に見て文化的な危機を招くと主張した。また、ラテン文字導入がトルコを近代化し、文明化するといった言説にも強い疑念を表明し、ラテン文字を用いずとも「進歩」している国として、彼が強い関心を持っていた日本を引き合いに出した(21)。

日本の複雑な文字が彼らの進歩の妨げになったと言えるか？　否！　つまり、文字の形は進歩の妨げにはならないのである。日本の文字の難しさを誰も否定できないだろう。しかし、言語と先達の遺産のために、日本人たちはこの国家的問題に犠牲精神をもってのぞんでいるのである。そもそも、国家に貢献するということは、犠牲精神をもってのぞむということではないか(22)。

さらにガランティは、文化文明の保持者たる民族は、過去を忘れたくなければ、社会的構成物のひとつである文字を捨ててはならないと訴えた。犠牲を払ってでも文化的遺産である独自の書記伝統を維持すべきだという見解は、目指すべき社会の参照元として近代西欧に目を向け、ラテン文字を用いて様々な問題を一気に解決しようとする受容派の主張とはあまりに折り合いがつかなかった。

ただし、アラビア文字表記に比べたときのラテン文字表記の優位性を強調するという点で共通していた受容派のなかでも、導入の根拠はそれぞれ異なっていた。実用性、効率性以上に、文字問題を共和国体制のありかたと結びつけてとりあげる論者もあらわれた。ジェラール・ヌーリは、自身の刊行するイクダム紙において以下のように述べている。

〔……〕ラテン文字の承認は、トルコ革命の、ガーズィー〔筆者注：アタテュルクのこと〕革命の歩みの一つである。これにより、トルコ民族は今まで属していたアジアから出る。つなぎ止められていた過去から永遠に離れる。この革命の結果、われわれはウラルアルタイ民族のなかでも非常に進歩しているマジャール人、フィン人、エストニア人などのように、ヨーロッパ世界にも間違いなく追いつくだろう。

トルコ革命は途中で終わらない。道半ばで終わる革命は問題を先延ばしにする統治と同じである。我が民族の指導者であるムスタファ・ケマル閣下は民族を救うために最大の努力をもって計画のために働いた人である、そして過去に描いた道程を最後までたどって来た。文字を変えることもこの大きな文明計画の一段階なのである[23]。

ヌーリの議論では、アラビア文字の廃止とラテン文字の採用は、技術的な面での効率化など、合理的精神に裏打ちされたものというより、それが革命理念に合致し、トルコの脱亜入欧に不可欠であるとみなされていることによる。ラテン文字の採用を革命理念に結びつけて後押しする、こうした主張の展開と軌を一にして、それまで具体的な動きを見せなかった体制側が沈黙を破る。

五　政策決定に到るまでの体制側の論理と「トルコ文字」の誕生

一九二三年の共和国建国以来、メドレセの廃止による教育の国家管理化や、ターバンおよびトルコ帽を禁止する服装改革など、様々な世俗化、西欧化政策が矢継ぎ早に断行されていたが、

ムスタファ・ケマルは文字問題についての態度を明確にしていなかった。ケマルは第二立憲制期に入る数年前にはすでに、「西側文明に加わることを妨げる文字を捨て、ラテン起源のアルファベットを選ぶべきだ」と語ったとされるが、一九二二年、報道記者代表との会見の際、ラテン文字の導入時期に関する質問に「まだそのときではない」と回答し、共和国期に入っても議論の成り行きを見守るのみであった[24]。しかし、一九二六年にバクーで行われた第一回トルコ学会議でソヴィエト全土のムスリムがラテン文字使用に移行すると決議されたことで、ラテン文字導入をとりまく環境には変化が訪れていた[25]。

一九二八年五月二〇日、当時の報道でラテン文字化の先駆けとして登場する「国際数字の承認に関する法」が大国民議会を通過し、六月よりインド数字がアラビア数字に置き換えられてから、事態は急速に展開する。五月二三日、内閣により国会議員、言語専門家、官僚から九名の委員が正式に選定され「言語委員会」が組織された。フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、ハンガリー語などに使用されている文字が検討され、トルコ語の音声の一つ一つをいかに示すかについてまとめた報告書が提出された。八月初頭には、新たな文字が準備されたことで、ラテン文字受容導入の流れは既定路線化する。この時期すでに、新聞各紙ではラテン文字導入の文字が踊っている。

一九二八年八月九日未明、ケマルはついにイスタンブルのサライブルヌで行われた共和人民党の催しの席で、文字革命の開始を知らせる演説を行うに到る。

同志諸君、われわれは、われわれの美しい言語を表現するために新トルコ文字を採用する。われわれの美しく、流麗で、豊かな言語は、新トルコ文字によって顕現する。数世紀にわたりわれわれの頭を鉄枠の中にとどめていた、不可解な、われわれが理解できない記号から自らを解放しなければならない。〔……〕すべての国民、女性に、男性に、荷担ぎに、船頭に教えよ。これは愛国行為、国を愛する者の義務であると心得てもらいたい。この使命を果たすにあたって考えてみたまえ、ある国、ある社会の一、二割は読み書きを知っており、八、九割が知らない、これは恥である。人たるものはみなこのことを恥じるべきである。この国の国民は恥じるために生み出された国民ではない。讃えられるために生み出された、その歴史を称賛で満たされた国民である。国民の九割が読み書きを知らないとしたら、瑕疵はわれわれにあるのではない。瑕疵はそれらにあるのだ、トルコ人の性質を理解せずに、ある種の鎖でもってわれわれの頭を縛るそれに。過去の欠陥を根本から一掃する時が来た。過ちを正そうではないか。過ち

が正された暁には、全ての国民に努力してもらいたい。遅くとも一、二年のうちに全トルコ国民が新しいトルコ文字を学ぶだろう。国民はその文字と知性をもって、彼らが文明世界の側にあることを示すだろう[26]。

トルコ文字採用を宣言したこの勇ましい演説のなかでは、われわれの美しい言語、すなわちトルコ語が称揚される一方で、アラビア文字は訳の分からない記号であり、欠陥であると断じられ、トルコ国民はこの「知性を封じる鎖」から解放されるべきだとされた。文字と宗教の結びつきを考慮すれば、鎖とされたアラビア文字は、イスラームを含意しているともいえる。オスマン・イスラーム文化の象徴たるアラビア文字を廃しトルコ文字を採用することは、世俗的な近代国民国家への大規模な看板の架け替えであった。

一九二八年八月一一日、二五日、二七日、二九日には、国会議員、高官、学者などの参加のもと、イスタンブルのドルマバフチェ宮殿で委員会により提出された新しい文字についての会議がもたれた。最終日、「国民の識字化のためには、トルコ語に適さないアラビア文字を放棄し、ラテン文字を基にしたトルコ文字を容認する以外の選択肢はないこと」「委員会が提案した文字は、トルコ国民が必要としているものを提供するにふさわしいこと」「文法と表記法規範は、言語の発展や改良、国民の嗜好を勘案しながら改革すること」が決議された[27]。このあと、ケマルは国内遊説を開始し、各地で黒板を持ち出して文字を教える様子が連日報道された。まだ法的な決定をみない段階であったが、新しい文字の姿は政府部局、メディア、学校までひろがり始めていた。

そして、一九二八年一一月一日、大国民議会において十一項からなる「新トルコ文字法」（法一三五三号）が承認されるに到る。以下に示すのはムスタファ・ケマルによる議会開会演説記録の一部である。

〔……〕親愛なる同志諸君！　まず、あらゆる進歩に最も不可欠な問題に触れたい。何よりもまず、偉大なるトルコ国民に、彼らの努力をすべて無益にする欠陥のある方法以外に、簡単な読み書きの鍵を与えることが必要である。（長い拍手）

偉大なるトルコ国民は、少ない労苦、短い道のりで、われわれの美しく高貴な言語に容易に適応するような手段をもって、非識字から救われ得るのである。読み書きの鍵となるのは、ラテン文字から作り出されたトルコ文字だけである。（拍手）簡易な試行は、ラテン文字をもとにしたトルコ文字がトルコ語にどれだけ適しているのか、都市で、村で、齢を

重ねたトルコの息子たちがどれほど簡単に読み書きをするかを太陽のように明らかにした。大国民議会の決定によって、トルコ文字が明確性、そしてその合法性を獲得したことは、我が国の発展への戦いに通じる門扉となった。（拍手）諸民族のなかでも、聡明で成熟した偉大な民族の言語として間違いなく数えられるトルコ語に新しい命を吹き込むことになる第三回大国民議会は、不朽のトルコの歴史においてだけではなく、全人類の歴史のなかの素晴らしい遺産となるだろう。（長い拍手）

諸君！　トルコ文字の承認は、われわれすべて、我が国の祖国を愛する成人した息子たちすべてに重要な使命を課す。この使命とは国民が読み書きを完全に学ぼうと示す情熱と愛に奉仕し、助力することである。われわれはみな私的、公的な生活のなかで出会った読み書きを知らない男性、女性、国民すべてに教えることに熱意を示さねばならない。我が民族が何百年ものあいだ解決できなかった問題が、数年の間で完全に達成されることは、地平線のすぐそこで我々の目をまぶしく照らす勝利の太陽である。（拍手）われわれはどんな勝利の喜びにも比することのできない偉業の興奮のなかにいるのだ。国民を非識字から救う純粋な教師の心が、われわれを満たしているのである。（拍手）

親愛なる同志諸君、高潔かつ不朽の記憶とともに、偉大なるトルコ国民は新しい光の世界へ入っていくのである。（ブラボーの声、激しく長い拍手）[28]

サライブルヌでの演説同様、新たに導入される文字は「ラテン文字」とは呼ばれず、あくまでラテン文字をもとに作られた「トルコ文字」として登場する。ここで立ち現れた新しい文字は西欧からの借り物ではなく、共和国トルコを象徴するものとして新しい価値をあたえられていた。これを学び教えることは愛国行為であり国民の使命だと数えられた。

法の制定により、一九二九年一月初頭以降、トルコ語の公的私的な看板、標識、広告、映像字幕や刊行物はすべてトルコ語で記されることが義務づけられた。全官公庁において、公的なトルコ文字の使用開始日は一九二九年の年初以前とされ、人口登録証など証明書類の記載も一九二九年六月以降すべてトルコ文字に改められることが決定した。新聞紙上においては、各都市で開かれる文字講座につめかける人々の様子が幾度も報道されている[29]。強調されているのは、新しい文字を学ぼうと押し寄せる人々の学習熱である。一九二九年には、十六〜四十歳の男女すべてを対象として識字教育を行う「国民学校」が開始された[30]。宣伝組織も構成され、都市部では映画館や劇場、村落

部では市場などで、新しい文字習得への関心を喚起すべく啓蒙活動が行われた。

こうした熱狂とは裏腹に、法的な規制の範囲外である私的領域の乗り換えは思ったように進まなかった。体制側にとってこの問題を把握することは重大な課題であった。一九二九年六月二一日付の内務省報告書には、カイセリ、シヴァス、シェビン・カラヒサルにおいて新しい文字が用いられておらず、特に知識人たちの間で交わされる私信が全てアラビア文字でなされているため、新たな通達が必要である旨が記されている(31)。一九三五年以降は、人口センサスにおいて識字者としてカウントされるのはラテン文字が分かるもののみとなった(32)。トルコ語話者であるか否かに関わらず、ラテン文字で表記される西側言語が分かる者は識字者として位置づけられる一方で、アラビア文字表記しか知らない者は非識字者とされた。アラビア文字の読み書きができる者を、非識字者としてカウントすることに混乱が見られたためであろう、統計局は一九四〇年人口センサス実施前にこの点について「聞かれている読み書き能力は、新トルコ文字の読み書きである。アラビア文字の読み書きを知っているものは、「はい」と回答できない。「はい」という回答は、新しい文字の読み書きを知っているものだけに認められる」と注意を促している(33)。国家領域内のどの地域にどのぐらいの割合で識字者がいるのか。国家がこの問題に敏感であったのは、トルコ文字表記の習得と使用が、ある意味では共和国理念の共有を示す指標でもあったためである。あらたな文字表記が私的領域も含めて国家領域内にあまねく広がることは、共和国イデオロギーの浸透が可視化されてゆく過程でもあったのである。

六　おわりに

ここまで見てきた通り、一九世紀以来、知識人と政治エリートたちが終わりのない議論を続けて来た文字問題は、共和国期には技術的な問題をはるかに飛び越えていた。それは、揺れ動く「国民像」と絡み合いながら、我々の言語がどのように表象されるべきかという問いを引き出したのである。そして、共和国のシンボルとして承認された「トルコ文字」に、文字以上の意味が付与されたことが、結果としてアラビア文字表記の持つ象徴性をもたかめることになったといえよう。一気呵成に押し進められた文字革命は「完遂」されたものの、アラビア文字表記に単に郷愁以上のものが潜んでいることは、政治的摩擦のなかで現在もたびたび姿をのぞかせる文字革命の評価からも読み取れる。

註

（1）トルコにおいて共和国期の言語政策を政治学や社会学と接合し、批判的に検証する学術的研究が多く見られるようになったのは、二〇〇〇年代以降のことである。サドオールは、建国期の言語政策が政治的にデリケートなテーマであったという背景を認めたうえで、これまで十分な研究がなされてこなかったのはむしろ研究者たち自身の自己検閲から生じた結果ではないかと発言している。*Radikal*, Mayıs 24, 2007.

（2）近年アラビア文字表記は自治体による市民講座や私設ワクフなど様々な場で「オスマン語」として学ばれている。学習の場と形式は様々であるが、オスマン語がかつて歴史家の専売特許であったことを考えれば隔世の感がある。この一方でアラビア文字アレルギーも見られる。二〇一二年末、オスマン語必修化の議案が議会に提出された際には、過剰とも思える世俗派の懸念をよんだ。*Habertürk*, Aralık 14, 2012. http//www.haberturk.com/polemik/haber/803230-osmanlica-zorunlu-ders-olmali-mi（二〇一四年八月三一日最終閲覧）

（3）Coakley, John. *Nationalism, Ethnicity and the State*. Los Angels: Sage Publications, 2013, pp. 52-53.

（4）Korkmaz, Zeynep. *Atatürk ve Türk Dili Belgeler*. Ankara: Türk Dil Kurumu, 1992, p. 29. トルコ公定史成立の背景と『歴史』出版の経緯については、永田雄三「トルコにおける「公定歴史学」の成立 ―― 「トルコ史テーゼ」分析の一視角 ――」『植民地主義と歴史学 ―― そのまなざしが残したもの ――』刀水書房　二〇〇四年、一〇七―一三三頁を参照。

（5）例えば、Canpolat, Mustafa. “Arap Yazlı Türk Alfabesinin Gelişmesi” in Türk Tarih Kurmu, *Harf Devrimi'nin 50.yılı Sempozyumu*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Yayınları, 1991, pp. 51-53.

（6）記号等を含め六十種ほどの活字で対応できるラテン文字に比べ、アラビア文字では約四百五十種の活字が必要とされた。活字を組み、それを解体して元の場所に戻す煩雑さに加え、必要とされる作業スペースが植字工にとって実用的なサイズでなかったこと、さらに活字そのものの製作費がかさむことも問題であった。Kologlu, Orhan. *Osmanlı Döneminde Basın Teknikleri ve Araçları*. İstanbul: İstanbul Üniversitesi İletişim Fakültesi Yayınları, 2010, pp. 4-5. オスマン帝国における活版技術のひろがりについては林佳世子「イスラーム世界と活版印刷」『イスラーム　書物の歴史』名古屋大学出版会　二〇一四年、三五二―三七四頁を参照。

（7）Şimşir, Bilal N. *Türk Yazı Devrimi*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Yayınları, 1992, pp. VI-VII.

（8）Ülkütaşır, M. Sakir. *Atatürk ve Harf Devrimi*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları, 1973, pp. 17-18.

（9）Sadoğlu, Hüseyin. *Türkiye'de Ulusçuluk ve Dil Politikası*. İstanbul: İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları, 2003, p. 217.

（10）Ülkütaşır, *op. cit.*, pp. 17-18.

（11）例えば、一九一〇年、当時オスマン帝国の統治下にあったアルバニアでラテン文字を基にした新しい文字を広めるためのフェトヴァー発布要求がだされたが、「コーランはラテン文字で記すことができないため、イスラーム国家においてはラテン文字

の使用は認められない」という理由で拒否されている。Şimşir, *op. cit.*, pp. 39–41.

(12) イブラヒム・スィナーシーはラテン文字の使用により二、三％程に留まる識字率を短期間で上昇させることができると主張した。Ülkütaşır, *op. cit.*, pp. 20–21, 32–33.

(13) Yorulmaz, Hüseyin. *Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Alfabe Tartışmaları*. İstanbul: Kitabevi Yayınları, 1995, pp. 42–43. 新井政美「ナムク・ケマルをめぐる二、三の問題点」『史学雑誌』八六（四）一九七七年、四一一—四二七頁。

(14) 代表的な例が、第一次大戦期に用いられたいわゆる「エンヴェルアルファベット」である。母音を示す文字を増やし、すべての文字を接続せずに独立形で記述する。印刷が非常に簡易であったが、主に軍内部の通信目的で使われるにとどまった。Aytürk, İlker. "The First Episode of Language Reform in Republican Turkey: The Language Council from 1926 to 1931" in *Journal of the Royal Asian Society of Great Britain & Ireland* 18-3, 2008, p. 280. ムスタファ・ケマルはエンヴェルアルファベットについて、一九二八年末、「よい考えだが、中途半端でおまけにタイミングが悪い。戦時は文字を扱う時ではない。」と語ったといわれる。Lewis, Geoffrey. *The Turkish Language Reform, A Catastrophic Success*. New York: Oxford University Press, 1999, p. 29.

(15) *Resimli Gazete*, Eylül 22, 1923, in Yorulmaz, *op. cit.*, pp. 94–97.

(16) *Vakit*, *Tanin*, *Akşam*, Mart 3, 1923, in *ibid.*, pp. 90–93.

(17) *Ibid.*, p. 198, 206, 207.

(18) *Ibid.*, p. 206, 211.

(19) *Ibid.*, p. 206, 211, 216, 232.

(20) Galanti, Avram. *Arap Harfleri Terakkimize Mani Değildir*. İstanbul: Hüsn-i Tabiat Matbaası, 1927. Trans. Bali, Rıfat N. İstanbul: Bedir Yayınevi, 1996.

(21) ガランティはトルコと同じくラテン文字受容が提唱されていることが知られていた日本の文字表記問題について聞き取り調査を行うべく、イスタンブルの日本大使館を訪れ、当時一等書記官をしていた若き日の芦田均と面会したことを記している。ガランティは芦田の「（日本の文字表記が）どんなに困難かご覧になれるでしょう。しかし、どうすることもできません。民草は国家的務めに献身せねばなりません。」という発言を紹介したうえで、日本において教育や印刷などの分野で実践されている文字使用への努力を報告している。

(22) Galanti, *op. cit.*, pp. 32–34.

(23) İkdam, Mayıs 7, 1928, in Yorulmaz, op. cit., pp. 297–301.

(24) 曖昧な態度がとられた背景について、当時、大国民議会が宗教指導者やデルヴィーシュのシェイフを多く抱えていたことの影響が指摘されている。Lewis, *op. cit.*, p. 32.

(25) オルタイルはアゼルバイジャンでのラテン文字導入がトルコの文字改革を後押ししたわけではないと評価しており、むしろトルコにおける文字改革がソヴィエト内のトルコ系民族に影響を与えたと述べている。Ortaylı, İlber. "Türk Harf Devriminin Dış Ülkelerdeki Etkileri Üzerine" in Türk Tarih Kurumu, *op. cit.*, pp. 104–105. しかし、ここで重要なのは、サドオールが指摘するバクー決議によるトルコ主義者たちのラテン文字に対する態度の軟化である。第二次立憲制期以後、トルコ主義者が関心を持つムスリムは、アラブのムスリムよりむしろロシアのトルコ系ムスリムであった。彼らにとって、アラビア文字表記

はイスラーム統一のしるしであると同時に、母音をすべて示さないという特徴によりそれぞれの音声的な差異を隠すことを可能にし、トルコ語の地域差を解消するものであった。バクーでの決定は、トルコ主義者たちがラテン文字受容に反対する必要性を低下させたと言える。Sadoğlu, *op. cit.*, p. 221.

(26) Korkmaz, *op. cit.*, pp. 33–34.

(27) Ülkütaşır, *op. cit.*, p. 77.

(28) Korkmaz, *op. cit.*, pp. 47–48.

(29) 例えば、一九二八年九月七日付けのジュムフリイェト紙には、「至る所で教室が開かれ、国民が新しい文字を学ぶために競い合っている」と写真入りで報じられている。

(30) 一切の読み書きを知らない国民のための四ヶ月の講座と、アラビア文字の読み書きを知る国民向けの二ヶ月の講座に分けられた。学校、モスク、政府サロンなどと並び、クラブやコーヒーショップなどを講座実施場所として使用することが通達で定められた。トルコ文字をすでに学んだ者については通学義務が免除された。

(31) Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi. 030.10/12.73.4.21/6/1929.

(32) 調査に際して出された通達では「新しい文字の印刷物を読めるものには《はい》と、読めない者には《いいえ》との回答を記入する。新しい文字を書けるものには《はい》と、書けない者には《いいえ》との回答を記入する。西側言語を書くことができるものについても《はい》と記入する」と指示されている。Devlet İstatistik Enstitüsü. *Genel Nüfus Sayımı, 20 İktesrin 1935: Kanunlar, Talimatnameler, Kararnameler, Taminler, Örnekler*. 1936, p. 47.

(33) Aybar, Celal. "Sayımda Sorulacak Suallerin Gaye ve Faydalar" in Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü, *Nüfus Meselesi ve Nüfus Sayımı hakkında Fikirler*. 1941, p. 31.

（あきやま　ゆうこ／博士後期課程）